生産・交通・立地の連関構造分析からみた集落における長期継続要因に関する研究
―上州蚕糸業と絹流通構造を事例として― －千年村研究その 6-

正会員　○ 神保洋平[1]
同　　中谷礼仁[2]

古代集落　　古代道　　近現代
蚕糸業　　絹流通　　上州

1 はじめに

本稿では村落史、都市史、交通史、産業史を時間的重なり合いによって統括することで、これらの連関構造を分析し、そこから今まで指摘されてこなかった地域の長期にわたる継続要因を考察した結果について報告する。

本研究は＜千年村＞プロジェクト[1]によって 2014 年度に実施された、「利根川流域疾走調査」[2]の調査成果に多くを拠っている。

2 連関構造分析における利根川上中流域の妥当性

本研究において対象地域としたのは利根川上中流域に属している、かつて上州と言われていた群馬県地域である。この地域は近代において蚕糸業の隆盛により産業、交通が大きく発達した地域である。以下で社会構造における連関構造分析をこの地域で行う妥当性について確認する。

2-1 古代地名現在地比定による古代社会の影響

『和名類聚抄』[3]に記載される地名の現在地比定により、利根川上流域において現代日本における古代社会の影響が存在していることが指摘されている。[4]図 1 は利根川流域における古代群を基に＜古代社会顕在指数＞[5]を算出し、地図上に可視化したものに利根川及びその支流、流域を重ね合わせたものである。この図から地名において元群馬県北西から中部にかけての利根川上中流域が古代から現代に影響を与えていることが確認できる。

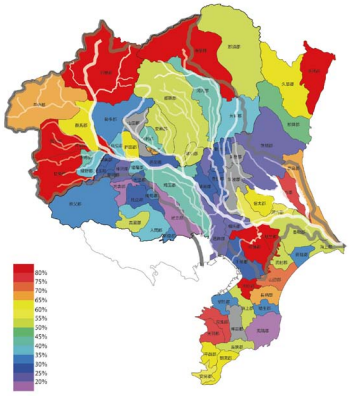

図 1.　利根川流域中における＜古代社会顕在指数＞による色分け

2-2 古代集落密集地域の存在

図 2 は関東地方における古代地名の現在地比定から、古代郷の現在地図へのプロットを行ったものである。この図から古代集落が密集している地域が確認でき、特に群馬県の利根川付近が顕著であることが確認できる。

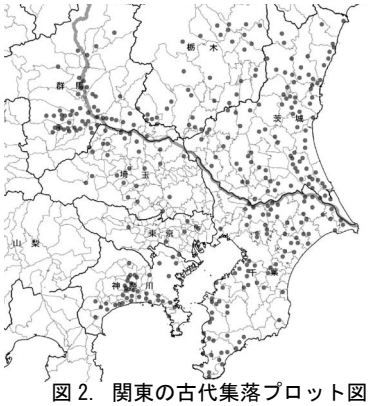

図 2.　関東の古代集落プロット図

2-3 古代から持続する上州蚕糸業と絹流通構造

上州はかつて東国－毛野国－上毛野国－上野国と言われていた地域であり、古代において豪族による大きな権力が存在した。また日本における蚕糸業伝来は弥生時代中期頃とされ、『日本書紀』『古事記』『魏志倭人伝』に記載があることからも古くから存在していたことが確認できる。さらに上州における蚕糸業は朝鮮半島からの帰化人により及ぼされたとされ、早い時期から蚕糸技術が存在し、各時代において絹流通が行なわれていた。[6]

また上州蚕糸業に関する交通（街道・鉄道）には、東山道（古代）、鎌倉街道上道（中世）、中山道・三国街道・日光例幣使街道・下仁田道（近世）、高崎線・信越線・両毛線・上野鉄道・東武伊勢崎線・上毛線・横浜線（近代）がある。さらに上州蚕糸業に関する絹流通に、御厨[7]（古代・中世）、絹市（近世・近代）、鉄道駅（近代）がある。[8]

つまり、以上の地名・古代集落・地勢・蚕糸業・絹流通の各分野から、上州で連関構造分析を行う妥当性がある。

3 考察 ― 古代から現代に至る連関構造分析

まず、2-3 で確認した各時代の交通・流通に関する要素と古代集落を重ね合わせることで、複数分野の要素が連関していることを可視化した。（図 3, 4）

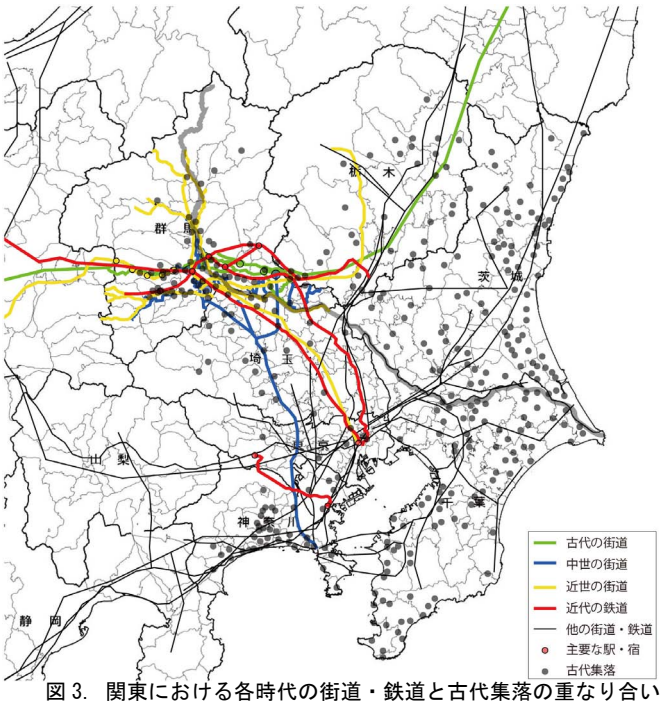

図 3.　関東における各時代の街道・鉄道と古代集落の重なり合い

図 3 から各時代の主要な交通が群馬県下部の利根川付近で集中して重なり合っており、さらにこの付近に古代集落が密集していることが確認できる。

A study on the long-term continuity factor in the village as seen from the linkage structure analysis of production, transportation, location ― A Case Study of Joshu silk industry and silk distribution structure ― -Millennnium villages research Part 6-

JIMBO Yohei,NAKATANI Norihito

図 4.　上州における各時代の街道・鉄道と古代集落の重なり合い

また、上州範囲を示した図 4 から古代集落が各時代の交通と絹流通拠点に重なり合う、もしくは付近に位置していることが確認できる。

つまり上州の対象地域において各時代に成立した交通は重なり合い、これらを繋いでいたのは絹流通であったと考えられる。そして、交通・流通の付近に古代集落が位置していることから、古代集落が古代から現代にまで長期にわたって継続してきた要因のひとつとして、古代から継続してきた交通・流通があると考えられる。（図 5）

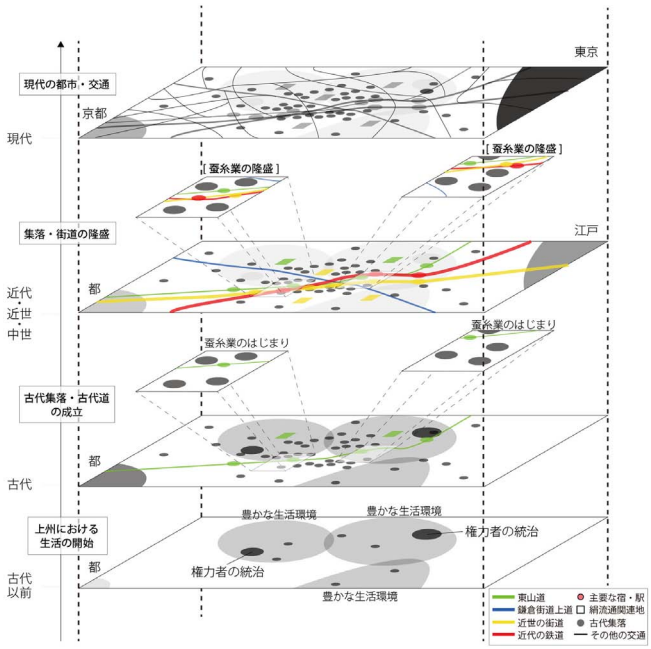

図 5.　古代社会と現代社会の関係ダイアグラム

4 まとめ

以上より、上州地域の社会構造についての連関構造分析として、各時代の交通・流通は古代集落が現代まで存続するための主要な継続要因のひとつであると考察した。

5 展望 ― 他分野と詳細地域による調査分析

本研究において、交通・流通を連関構造分析の主眼として考察を行った。いずれにせよ長期にわたる各地域の持続が、周囲との交通によって成立してきたことはまぎれもない事実であり、交通的視点からの地域研究が望まれる。本研究を一端として更なる調査・考察を行っていくことが今後の課題である。

また本研究では巨視的な分析による考察を行ったが、微視的な分析による考察を行わなかった。しかしあるひとつの集落毎や一定の地域単位で分析を行うことで、集落が継続している要因を更に明らかにできると考えられる。群馬県には 2014 年度に「富岡製糸場と絹産業遺産群」として、高山社跡[9] と田島弥平旧宅[10] の二つの養蚕民家が世界遺産に登録された。この二つの民家の周辺には古代集落に比定されている集落が多く存在する。（図 6, 7）また、「千年村プロジェクト」では、利根川流域における古代集落の詳細調査を開始する予定である。

これらの集落や地域を詳細に検討することで、集落の継続要因を更に明らかにすることが可能であろう。

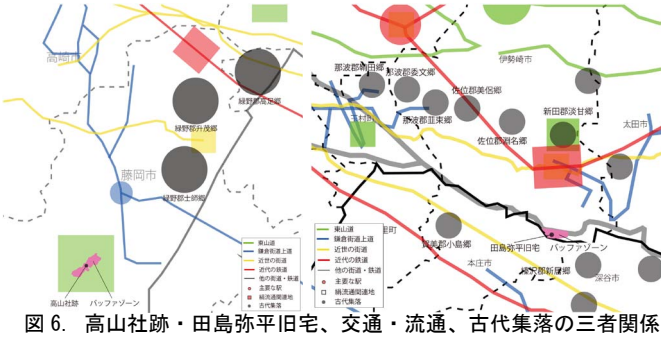

図 6.　高山社跡・田島弥平旧宅、交通・流通、古代集落の三者関係

註 1　参照：「千年村プロジェクト」ウェブサイト（mille-vill.org）＜千年村＞とは千年以上にわたり、度重なる自然的社会的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が持続的に営まれてきた集落・地域のことをさし、＜千年村＞プロジェクトは全国の＜千年村＞の収集、調査、公開、顕彰、交流のためのプラットフォームとして構築された。　**2** 参照：千年村運動体（2014）『持続的環境・建造物群継承地区＜千年村＞運動体 2014 年度 利根川流域疾走調査報告書』（私家版）2014 年 8 月 2 ～ 6 日にかけて、今後の集落地域の存続のための評価手法の開発を目的として、利根川流域の＜千年村＞と考えられる 48 村を悉皆的に調査した。　**3** 平安時代中期に作られた辞書。承平年間（931-938 年）、勤子内親王の求めに応じて源順が編纂。　**4** 参照：庄子幸佑『現代日本に於ける古代社会の影響に関する理論的研究 - 古代地名の現在地比定の分析を元に -』（早稲田大学中谷礼仁研究室修士論文 , 2013）古代地名の現在地比定から、地名において古代社会の影響が現代に存在していることを明らかにした研究。　**5** 参照：註 4 同上　＜古代社会顕在指数＞は現代社会とを空間的に結び付ける上での相対的な指標のこと。ある地域における＜古代社会顕在指数＞＝ある地域の大字領域に比定される古代地名 / ある地域における古代地名。　**6** 参照：『日本蚕糸業史』（大日本蚕糸会 , 1935-1936）・『群馬県蚕糸業史』（群馬県蚕糸業協会 , 1955）・伊藤智夫『絹 I ・ II』（法政大学出版局 , 1992）　日本・群馬県の蚕糸業に関する通史。『群馬県の歴史』（山川出版社 , 1997）・『群馬県史』（群馬県 , 1990）　現在の群馬県に属した地域に関する通史。　**7** 皇室や伊勢神宮の神饌を地方から出させるある種の指定神領域の荘園。　**8** 参照：『日本史小百科　交通』（東京堂出版 , 2001）・『日本交通史』（吉川弘文館 , 1992）　・『日本の街道史 16　両毛と上州諸街道』（吉川弘文館 , 2002）・『日本の街道史 17　中山道　武州・西上州・東信州』（吉川弘文館 , 2001）日本・群馬県の交通史に関する通史。　『歴史の道調査報告書　東山道』（群馬県教育委員会 , 1983）・「鎌倉街道」『歴史の道調査報告書集成 13』（群馬県教育委員会 , 2008）・『歴史の道調査報告書　中山道』（群馬県教育委員会 , 1997）・『歴史の道調査報告書　三国街道』（群馬県教育委員会 , 1997）・「日光例幣使街道」『歴史の道調査報告書集成 11』（群馬県教育委員会 , 2008）・『歴史の道調査報告書　下仁田道』（群馬県教育委員会 , 1981）群馬県の各時代の街道を文献・実地調査により明らかにし、まとめたもの。現在の風景と併せて紹介も行う。老川慶喜『日本鉄道史　幕末・明治篇　蒸気車模型から鉄道国有化まで』（中央公論新社 , 2014）・『駅 - 上州の鉄道 』（煥乎堂 , 1979）・老川慶喜『埼玉の鉄道』（埼玉新聞社 , 1982）日本・群馬県付近の近世鉄道草創期の詳細をまとめたもの。林玲子「関東生絹の流通構造」（土地制度史学第 21 号 , 1963）・矢島幹晴「江戸時代における養蚕業について - 蚕種流通街道に関する科学技術史的考察 II」（大阪薫英女子短期大学研究紀要　(39) , 2004）・矢島幹晴「江戸時代における養蚕業について - 蚕種流通街道に関する科学技術史的考察 III」（大阪薫英女子短期大学研究紀要 (40) , 2004）　近世・近代における蚕糸業の流通方法についてまとめたもの。　**9** 高山村（現群馬県藤岡市高山）の養蚕業者高山長五郎が 1884 年に設立した養蚕業の研究・教育機関。　**10** 明治初期に大きな影響力を持った養蚕業者田島弥平が自身の養蚕理論に基づいて改築した民家。

図版出典　**図 1** 庄子幸佑『現代日本に於ける古代社会の影響に関する理論的研究 - 古代地名の現在地比定の分析を元に -』（早稲田大学中谷礼仁研究室修士論文 , 2013）P, 47 より引用　**図 2 ～ 6** 筆者作成

※本報告は、神保洋平『古代集落の連続　近代産業からみる古代集落と現代都市からみる古代道 - 上州蚕糸業と絹流通構造を事例として - 』（2014 年度早稲田大学建築史研究室卒業論文）に基づくものである。

1 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻　修士課程
2 早稲田大学創造理工学部建築学科　教授・博士（工学）

1 Graduate student,School of Science and Engineering,Waseda Univ.
2 Prof,School of Creative Science and Engineering,Waseda Univ.,Dr Eng.